徳島市　常三島遺跡
埋蔵文化財発掘調査実績報告書

サテライト・ベンチャービジネス・ラボラトリー

1997年10月30日

徳島大学埋蔵文化財調査委員会
徳島大学埋蔵文化財調査室

目次

1　調査地の名称と目的

2　調査地

3　調査期間

4　調査面積

5　調査体制

6　調査にいたる経過

7　発掘調査の成果

8　まとめ

第１図　常三島遺跡の位置
第２図　江戸時代徳島城下町と常三島
第３図　調査地の位置
第４図　ｻﾃﾗｲﾄ･ﾍﾞﾝﾁｬｰ･ﾋﾞｼﾞﾈｽ･ﾗﾎﾞﾗﾄﾘｰ棟遺構平面図
第５図　絵図と調査地

図版１　調査区全景：第1遺構面遺物出土状況
図版２　屋敷境溝完掘状況：第2遺構面掘り下げ状況：第２遺構面SE01土層断面
図版３　出土遺物：明治～大正 SG01遺物出土状況

1　調査地の名称と目的

常三島遺跡

徳島大学サテライト・ベンチャービジネス・ラボラトリー地点

（サテライト・ベンチャービジネス・ラボラトリー棟新営に伴う埋蔵文化財発掘調査）

2　調査地

徳島市南常三島町２－１

3　調査期間

平成８年６月６日～８月１０日

4　調査面積

６１９m²

5　調査体制

調査主体　徳島大学埋蔵文化財委員会

委員長　武田克之（徳島大学長）

調査担当　埋蔵文化財調査室　（室長　武田克之）

発掘担当者　北條芳隆

調査員　橋本達也

調査補助員　上田淑子　岸本多美子　井本尚子　山本愛子　安山かおり

6　調査にいたる経過

これまでに徳島大学常三島地区工学部構内では、92年度以降、工学部実習棟・地域共同研究センター・工学部光応用工学科棟の建設に先立って近世・武家屋敷を中心とする良好な遺構の存在を確認し、埋蔵文化財発掘調査を行ってきた。

周辺の状況から考えて、ｻﾃﾗｲﾄﾍﾞﾝﾁｬｰﾋﾞｼﾞﾈｽﾗﾎﾞﾗﾄﾘｰ棟建設予定地でも同様に近世武家屋敷遺構を中心とする良好な遺構の存在が予測されたため埋蔵文化財発掘調査を行った。

また、常三島遺跡の周辺では徳島県教育委員会による徳島城西の丸、新蔵町１丁目・３丁目遺跡、徳島市教育委員会による徳島城御殿・鷲の門などの各地点において近世徳島城および城下町遺跡の発掘調査が行われている。

ｻﾃﾗｲﾄ･ﾍﾞﾝﾁｬｰ･ﾋﾞｼﾞﾈｽ･ﾗﾎﾞﾗﾄﾘｰ地点の発掘調査では近代造成土を重機で掘削し、その下の近世包含層を人力掘削した。はじめ調査は橋本・上田・岸本・井本で開始したが、調査期間が十分にとれない状況で作業を急ぐため、６月２４日より山本、７月１６日より安山の参入を図った。なお、調査中は雨天もテントを張り調査を継続した。

7　発掘調査の成果

［遺構の概要］　検出された遺構面は大きく２面に分かれ、第１遺構面はT.P.0.20m付近、第２遺構面はT.P.0.00～-0.20m付近である。第２遺構面は遺構掘り込み面の高さに若干差があり、細分できる可能性があるが、遺構数が少なく調査時は一括して対応した。

遺構は大きく第１遺構面＝明治・大正期～江戸後期(18c後半～幕末)、第２遺構面＝江戸中～前期(17～18c)の３時期に分けられる。最も遺構数が多いのは江戸時代後期である。

調査区北側では東西方向の幅2mにおよぶ大型の溝１本と幅の一定しない浅い溝数本と土手を確認した。この溝と土手は南北の武家屋敷を区画する屋敷境と考えられる。

この屋敷境は、絵図などの検討から徳島藩士の佐野家屋敷と長谷川家屋敷の境部にあたることが想定できる。

『徳島藩士譜』による各屋敷居住者のデータを抜き出すと以下のようになる。

［北側］　佐野（玄真）家＝明暦３年召出。７人扶持１５石～７人扶持２０石。代々医師を世襲。

［南側］　長谷川（禎之助）家＝興源院（二代忠光）様代召出。５人扶持１０石～７人扶持１３石。代々、御広間御番を勤める。

屋敷境の溝は数本確認できたが本来は２本の溝で構築し、時間の経過とともに北側・佐野家側の溝は手を加え管理していた一方で、南側・長谷川家側の溝は埋まっては掘り返すということを繰り返したことが確認できた。すなわち、佐野家屋敷側は溝埋没の最終段階まで整然と一直線の大型溝で区画する。一方の長谷川家屋敷側は18世紀代と考えられる最下層の溝は小規模ながら一直線に延び整備されているものの、この溝埋没以降その上面にはとぎれとぎれで幅もまちまちの溝が重複しており、整備されていない。屋敷境溝は各屋敷ごとに管理整備状況が異なっていたことがわかる。

屋敷境の土手には松と見られる木が植樹されていた。また、屋敷境周囲には生活廃棄物を埋めた土坑が多数掘られていた。その内外の屋敷境部周辺からは陶磁器を中心とする大量の遺物が出土した。

また、長谷川家屋敷側の第1・第２の各遺構面で溝、土坑、井戸、性格不明遺構など多数の遺構を検出した。井戸は埋め戻すときに、人頭大の石を数個入れたのち焼土で充填するといった特殊な埋納法が取られていた。また、小規模な方形石積み遺構や土師質土器を土坑壁に沿って埋置した遺構などもあった。

他に明治中期～大正期の池と井戸・暗渠を確認し、未解明であった武家屋敷解体以後、高等工業専門学校設立の以前の土地利用解明の手がかりを得た。池の内部からは多量の陶器・磁器が出土し明治～大正期の技術革新の変遷過程を示す良好な資料を得た。

検出遺構	土坑	１００基	柱・杭穴	１００基
	溝	１８基	性格不明遺構	３基
	井戸	２基	池	１基
	暗渠	１基		

［遺物の概要］　屋敷境の溝やその周辺を中心に、各遺構から多くの遺物が出土した。最も主要な出土遺物は陶磁器である。ほとんどの遺物は18c後半～幕末の遺物でしめられるが、17～18cの遺物も一程度出土している。

その産地は肥前（伊万里）・瀬戸・京・信楽・備前などの広域流通圏をもつ製品と大谷焼などのように在地の阿波・讃岐地域で作られ、狭い範囲でのみ流通したと考えられるものがある。

陶磁器以外の特筆すべき遺物には、金貨「一分金」や刀の鍔などがある。一分金は「元文一分金」で18c中葉～19c前半の時期幅をもつものである。佐野家屋敷境溝の上端部から出土した。

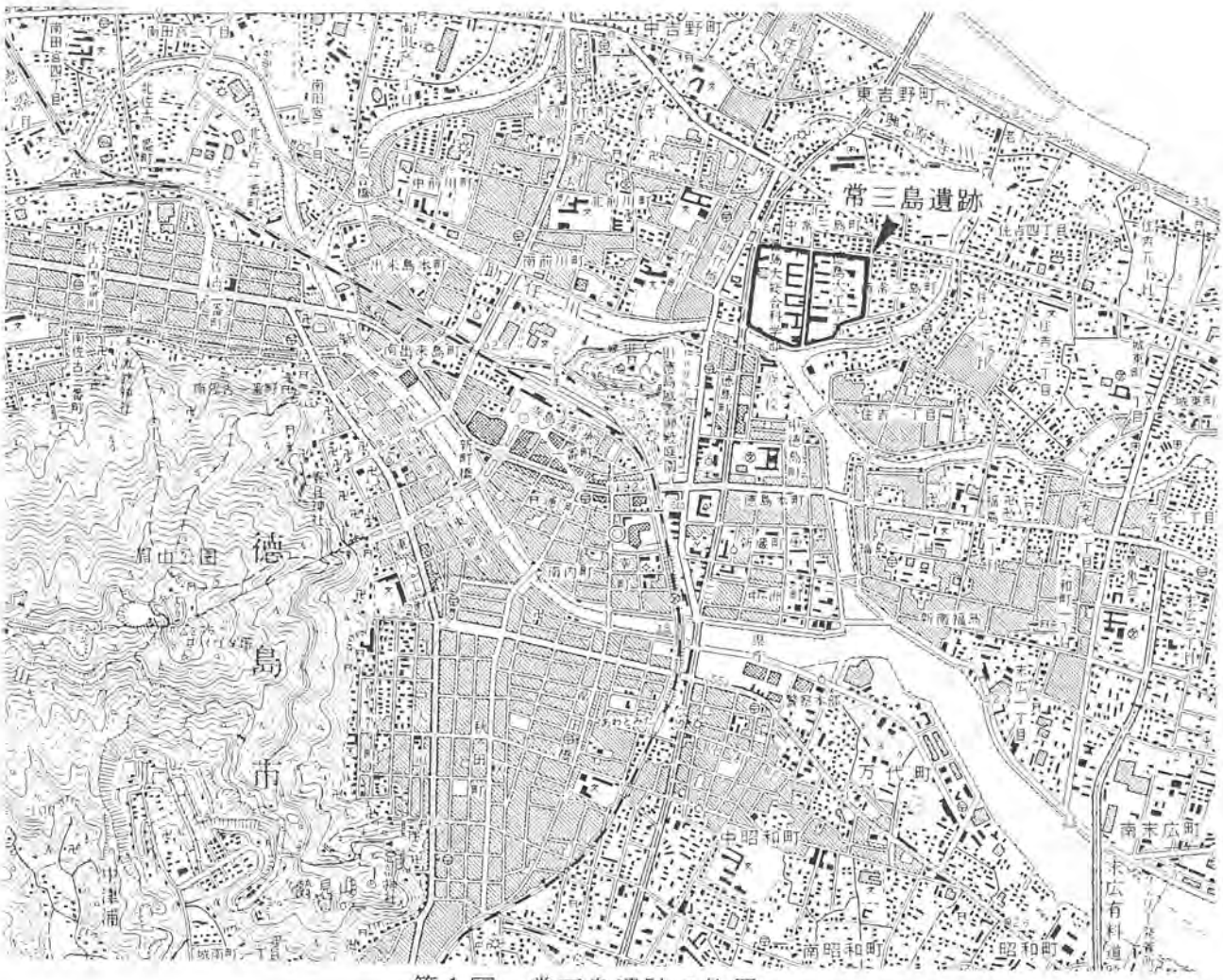
また明治中期～大正期と考えられる池より大量に出土した遺物は、この時期の良好な一括資料である。ここでは磁器に新しい技術が導入される一方、陶器などには江戸時代以来の伝統技法が色濃く残り、現代と近世をつなぐ様相を示す、技術革新期の遺物として注目できる。

出土遺物の数	陶磁器類	コンテナ９０箱	
	木器・漆器類	コンテナ１５箱	タッパ４０箱
	瓦	コンテナ６０箱	
	石	コンテナ１０箱	

8　まとめ

佐野家屋敷に関してはこれまでの地域共同研究センター地点や光応用工学科棟地点でも一部確認しており、屋敷地内は粘土質の土できちんと整地が行われていたことが判明している。一方で長谷川家屋敷側はところどころ砂が頭を出し、水がしみ出してくるような土で、きちんと整地されていたとは考えられない。このような状況から長谷川家屋敷の少なくとも北側に関しては、居住空間ではなかったと考えられる。このように今回の調査地点では、屋敷ごとで境溝や敷地の手入れが大きく異なることが確認できた。

今後、屋敷境溝から出土した遺物の検討などを通してその構築年代、溝の埋没・掘り直し過程などをより細かにして行く必要がある。また個々の遺構に関しても、その中から出土した遺物などを詳細に検討し、年代や性格を明らかにして行く必要がある。また、個々の遺物についても検討を加え、年代研究、近世徳島の地域色、流通構造などを明らかにして行く必要がある。



第１図　常三島遺跡の位置

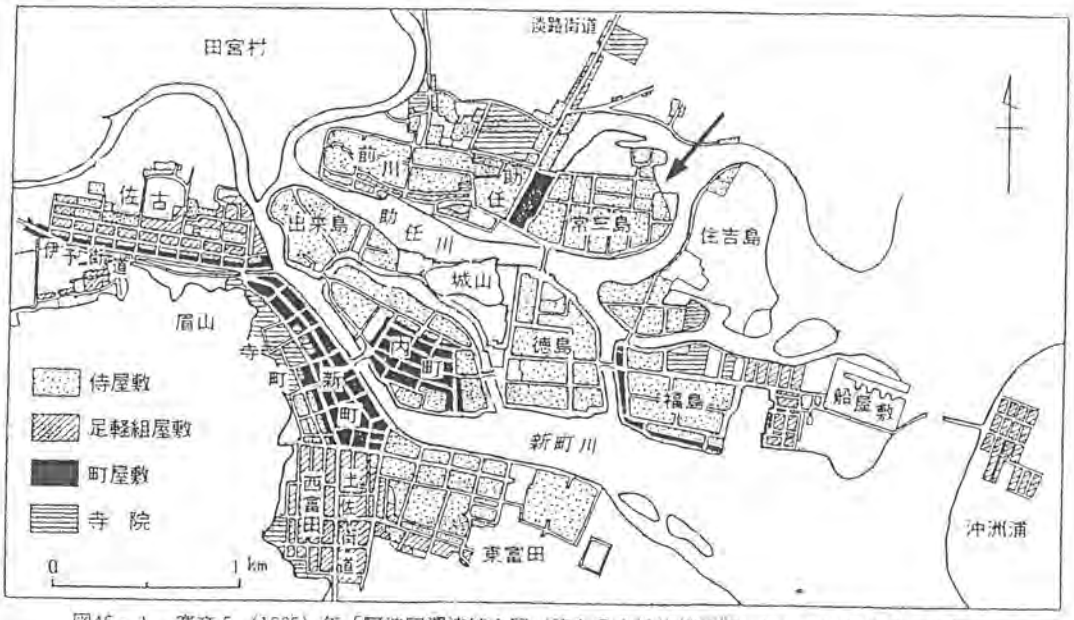
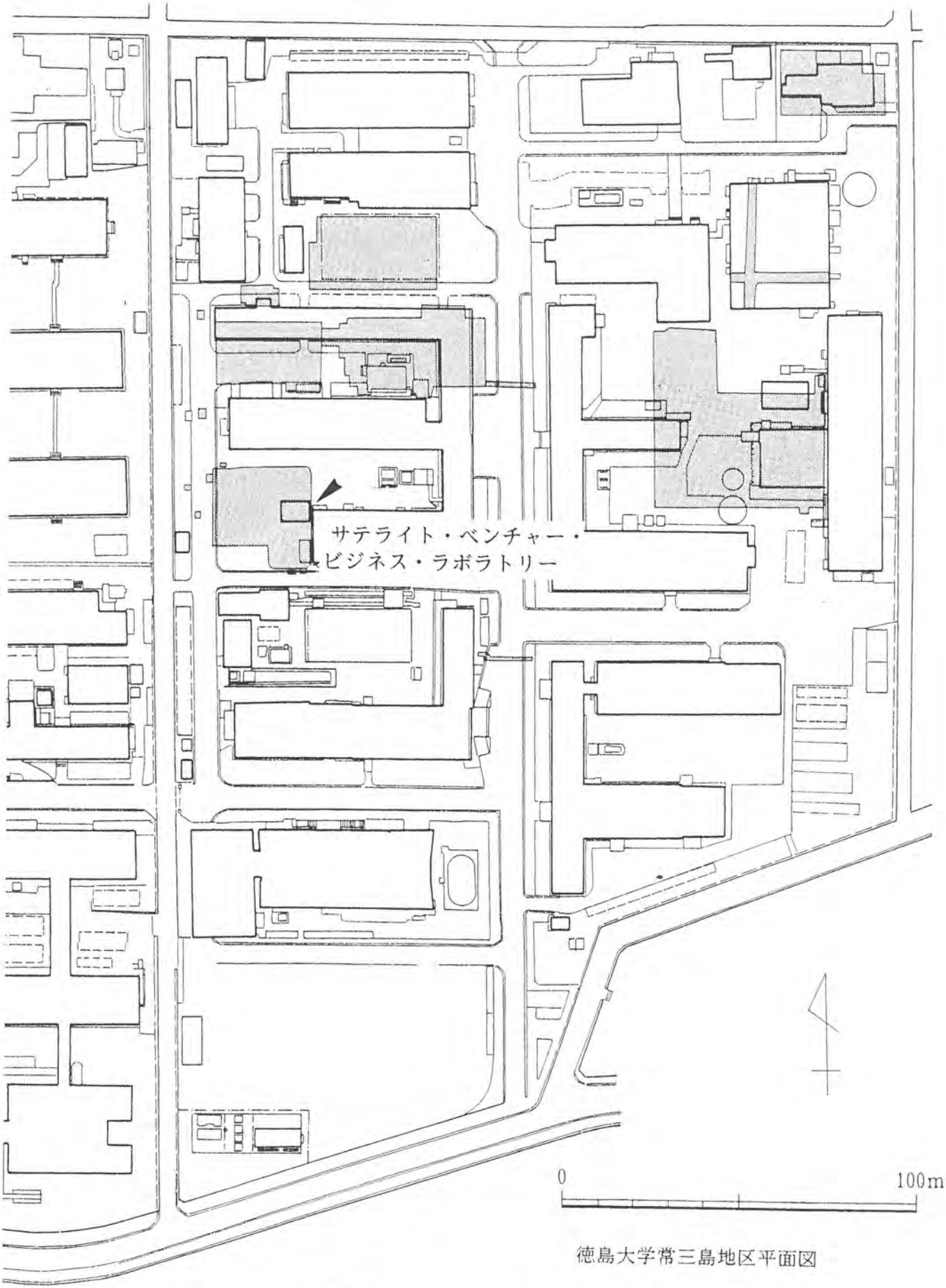


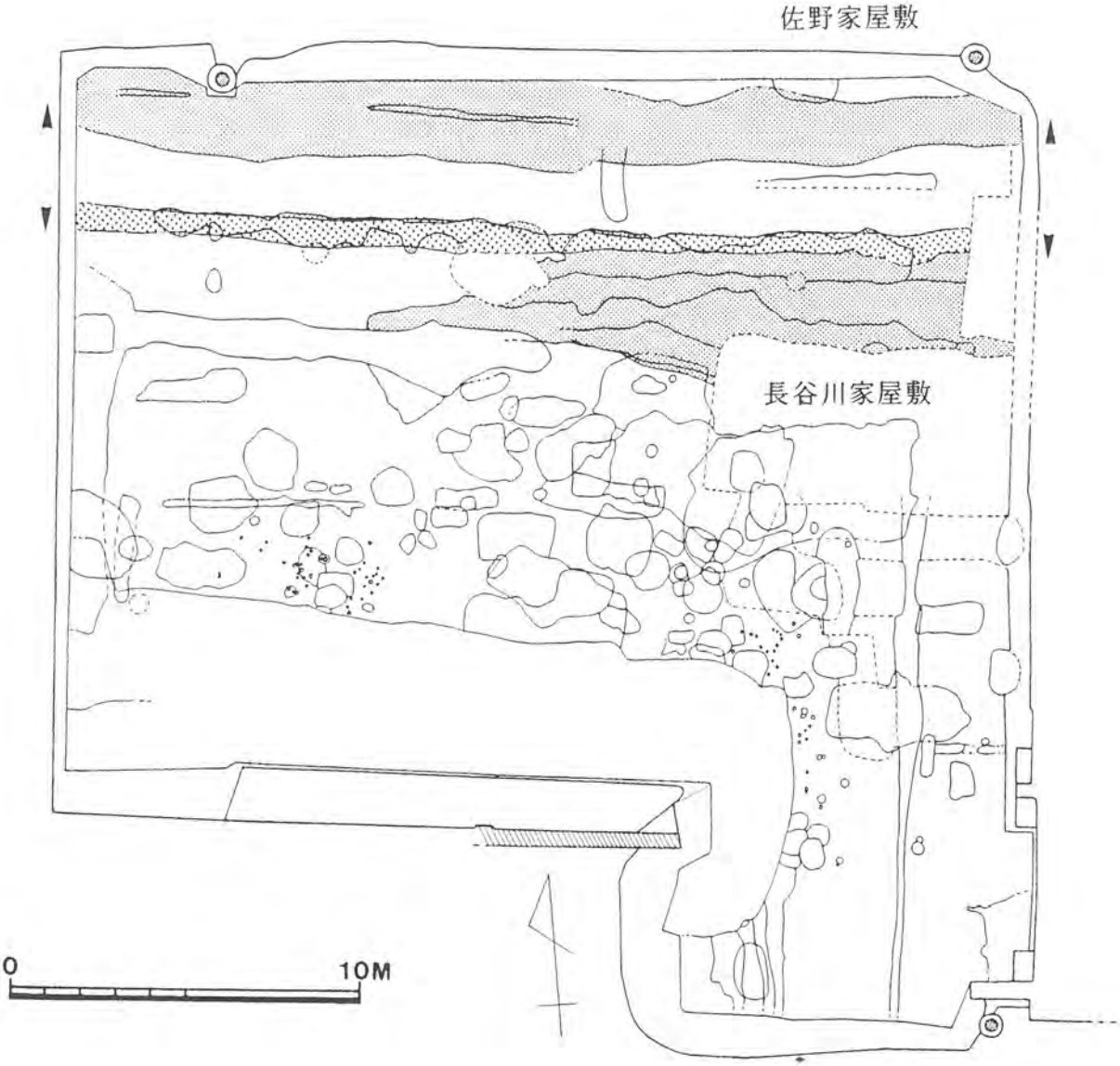
図46－１　寛文５（1665）年「阿波国渭津城之図」（徳島県立博物館所蔵）にみる徳島城下の町割
服部昌之（1966年）原図を一部修正。

平井松午1995「城下町起源の都市徳島」『徳島の地理』

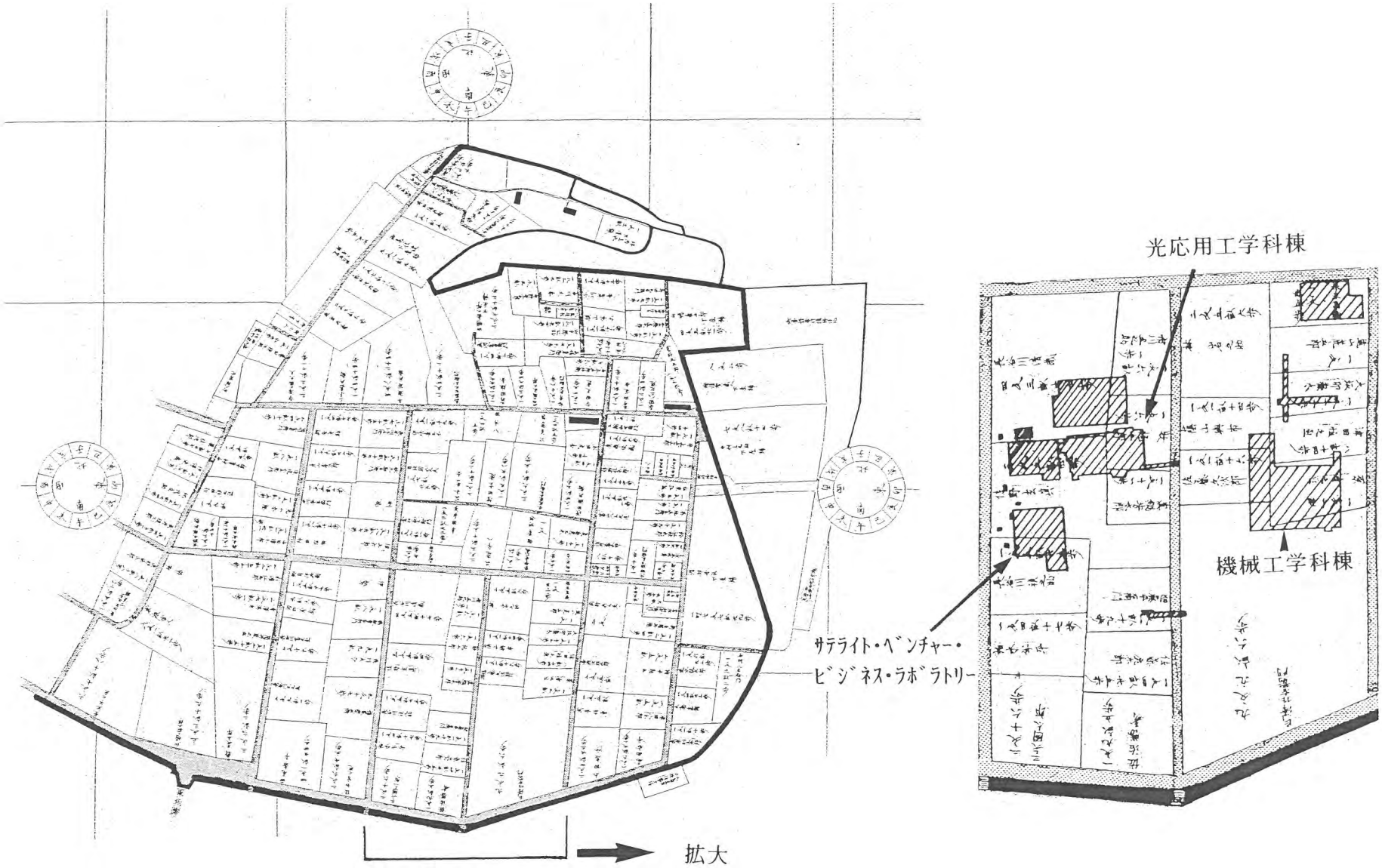
第２図　江戸時代徳島城下町と常三島



第３図　調査地の位置



第４図　ｻﾃﾗｲﾄ・ﾍﾞﾝﾁｬｰ・ﾋﾞｼﾞﾈｽ・ﾗﾎﾞﾗﾄﾘｰ棟遺構平面図
ｱﾐ掛けは屋敷境溝



第５図　絵図と調査地
「御山下島分絵図　常三島」　安政年間　個人蔵

調査区全景

（北東より城山・眉山を望む）

第１遺構面遺物出土状況

屋敷境溝完掘状況
（西より）

第２遺構面掘り下げ状況

第２遺構面　SE01土層断面

出土遺物

明治～大正 SG01遺物出土状況